

日税メールステーション特別号

～海外ビジネス情報～

あるビジネスマンの「アジア出張記。」

インド編

今回はインド編です。

■インド到着

インドにはバンガロールとチェンナイにオフィスがあり、この時はバンガロールに行きました。チェンナイオフィススタッフはバンガロールに電車で数時間かけて移動してくれています。

マレーシアからバンガロール空港に移動し、夜中に到着したにもかかわらず、現地のマネージャが我々を迎えてくれました。車と運転手を手配してくれていたのですが、運転の荒いこと！負けん気の強い運転手だったのか、とにかく追い越せる車は全て追い越していきます。

ホテルのチェックイン時、インド訛りの英語に少々苦勞し、部屋番号が書かれたカードをもらったら癖の強い文字で数字が読めずに戸惑い、そんなこんなで初日の夜が過ぎました。

■インド(バンガロール)の様子

土曜日の夜中に移動したため、インド初日は日曜日で、仕事抜きで現地散策となりました。バンガロールは標高が高い所にあるため、出張当時の8月下旬は気温が低く、朝晩は上着があっただけくらいです。

正直、街は綺麗とは言いがたく、道路に割れ目ができていて、ごみや動物の糞などはあちこちに落ちていて、所によっては悪臭がすることもあります。同行したシンガポールスタッフ(※何度もインドに来ています)のスタッフが言うには、"Bangalore is cleaner. xxx is dirtier, yyy is dirtiest!" (他の都市は伏字にします)と、インドの中ではそれでも綺麗なほうだとか。IT系の企業が多く集まり、シリコンバレーの影響も受けているため、街の感じもインドの他の都市とは異なるとのこと。

出張中に猛烈なスコールに遭い、短時間で止みはしたのですが、洪水状態になり、ものすごい勢いで水が流れていきます。向こうでは日常茶飯事なのでしょう。道路に割れ目があり、ごみが散乱していても、

スコールでゴミが洗い流されて割れ目から水が排出されるから、意外に合理的なのかもしれません。

■ヒンズー教、カースト制

インドというと、ヒンズー教とカースト制を思い浮かべる方も多いでしょう。牛肉を食べないため、ハンバーガー屋に行っても牛肉を使ったメニューはありません。レストランに行っても肉料理は、鶏や羊などが多いです。

カースト制については世界史の授業で4階級(バラモン、クシャトリア、バイシャ、スードラでしたっけ?)を習いましたが、それ以外にも生まれや言語、宗教など多数の要素が組み合わされて、実際にいくつかのカーストがあるのかは分からないそうです。結婚は同じカーストの人同士でしか認められないため、まず相手を探すのが大変で、日本で言う所の紹介所などに登録して世界規模で探す人もいるとのこと。また階級によって受けられる教育や就ける職業に制限があるので、日本で言う所の昇進や業務シフトも範囲が非常に限られます。

当グループのインドオフィスでも、仕事の役割が明確で、細々とした作業だけを担当する人もいます。他の人が雑用もしてしまうとその人の仕事を奪うことになるため、自分の業務の範囲外のことは基本的にはしません。このような考え方はインドに限った話ではないですが、日本人と一緒に労働する場合に留意すべきことの一つです。

ちなみに、IT業界は新興の業種のためカーストの影響を受けず、これまで制度の枠にとらわれていた人たちが集まってくるため急成長の要因になっていると言われています。



バンガロールの街

■現地企業訪問

この時は、インドスタッフへの経営統合の説明以外に、パートナー探しのために現地の企業を数件回りました。提携や委託などの可能性を探るため、同業や人材会社、開発会社など、事前に手配をしてもらって訪問しました。

御存知のようにインドへの日系企業の進出は多く、現地企業にはその仕事を取りたいという期待は大き

いのですが、同時に日本人のいわゆる NATO(No Action, Talking Only)に対して期待外れとも聞きます。

各社、自社の説明では、非常に愛想良く、自分たちはこれができるというアピールを非常に強く行います。インドに限ったことではありませんが、非常に低い確度であっても「できる」と言ってくるので、日本の感覚でまともに受け取ると危険です。

すでにインドと何度もやりとりのあるシンガポールのスタッフはこのように言っています。

"take their word with a pinch of salt"(疑って聞け、額面通りに受け取るな)

ある一社を尋ねました。この企業には日本の資本が入っています。驚いたのが、社長はじめ上級役職者や現場のリーダーが、日本人と変わらないほどの綺麗な日本語を話します。さらには、スタッフが我々のそばを通り過ぎる時に「失礼します(日本語)」と言いながら会釈をしていくのです。日本語のみでなく、日本のマナーまで社員にしっかりと身につけさせており、よくぞここまで、と思いました。この企業を辞去する時に、社長自ら、我々の車が見えなくなるまで玄関で見送っていただきました。ここまでの徹底ぶりは、他に例を見たことがありません。

日本企業が海外に出た時に、日系企業を相手(顧客、パートナー)にビジネスを行うということをよく見聞きますが、日本語が通じて、文化の理解があるということはこんなにも安心して接することができるのかということを実感しました。

■アジアスタッフの一面

訪問先の企業では、ちょっとヒヤッとした場面がありました。

今後の提携等の可能性を想定して同業の一社を訪問した際に、当グループのアジアスタッフが訪問先の担当者と激しい口論になりました。詳しくは書けませんが、両社で提供している同様のサービス(当然競合します)に関して、それを手掛けるポリシーに違いがあるため相容れない、というようなことを言っています。

今回は、それは分かったうえで別の分野で手を組むことも想定しているため、御門違いな話なのですが、アジアスタッフの、自分が手掛けていることへの自信と同時に、少し気の長い話には興味が薄い、という部分を目の当たりにしました。日本人の慎重さあるいは気の長さ(先を見て積み上げていくという意味です)は、急成長しているアジアでは珍しいものなのだろうか、とあらためて考えました。



Global Knowledge Asia インドオフィス受付

■インドの食事

インドに行くと言うと「お腹壊さないように気を付けて」と必ず言われます。特に「ボトルの水以外は飲むな」とは、日本人以外からも言われます。あるレストランに入った時のこと、ウェイターがコップに水差から水を注いでくれました。

すかさず「ボトルの水にしてくれ」と頼みました。ウェイターはその通りにボトルを持ってきてくれたのですが、我々のコップに注いだ水を、目の前で水差しに戻し、平然としています。これには唖然としました。

飲み水に気を付けていた我々に次の罠が。テーブルには椅子の数だけバナナの大きな葉っぱがおかれています。ご丁寧に洗ってあり、水で濡れています。この上にお皿を置くのかなと思っていたら、いきなりライスを盛りつけられました。そう、この葉っぱがお皿の代わりなのです。飲み水を気を付けても、皿(葉っぱ)に水がついていたのでは意味がなく、この時には覚悟を決めました。幸い「私は」帰国後もお腹を壊すことはなく、水あたりを避けられました（他の同行者については、ここでは触れませんが）。

ちなみに、バナナの葉は、殺菌効果があり、スプーンで葉の表面をこすったときに良い香りがするため、皿の代わりに使うそうです。食事は右手を使い、左手は不浄のものとして使いません。もちろん、ナイフとフォークを使って食べることはしますし、どこから見ても外国人の私が右手を使っていたからといって白い目で見られはしませんでした。パンを片手でちぎって食べるのは結構大変でした。

■最後に

東南アジアの国々とは大きな違いがあることを実感したインド。インドと一口に言っても地域差が非常

に大きく、私が言ったバンガロールはそのほんの一端です。

この一連の出張でいくつもの国を肌で感じできましたが、これまで日本国内のみのビジネスに携わってきた自分にとっては、大きな衝撃を受けました。開眼したというのか、殻が破れたというのか、川で泳いでいた人が海に行ったような感じとさえいえるでしょう。次回総集編でそのあたりについてお伝えします。

【執筆者】

柳 恵太 (やなぎ けいた)

グローバルナレッジネットワーク株式会社

サービス戦略本部 本部長

ソフトウェアベンダー、メーカーにて主に移動体通信システム開発のエンジニアおよびプロジェクトマネージャを経て、2005年にグローバル ナレッジ ネットワークに入社。

新サービス立ち上げや技術者育成カリキュラムの企画・開発・実施、大型プロジェクトのマネジメント等の業務を経て、2011年9月から現職。

現在は、サービス企画、マーケティング、海外展開等を推進する部門を統括。



【グローバルナレッジについて】



Global Knowledge.

グローバルナレッジネットワーク株式会社は、世界約30か国に展開するITとビジネススキルのトレーニングプロバイダーです。国内外で活躍するビジネスパーソンに向けて、ヒューマン・スキルやビジネススキル、オリジナルITトレーニングやITベンダーの認定トレーニングを提供しています。

▽あるビジネスマンの「アジア出張記。」はこちらのサイトでもご覧になれます

<http://blog.globalknowledge.co.jp/asia/>